

# 立命館大学人文科学研究所紀要

No. 138

目次

小特集：人文・社会科学の意義を見つめ直す  
—感染症、戦争、災害等の「グローバルなリスク」に立ち向かう  
(知)のために—

巻頭言	遠藤英樹(1)
観光という「希望の原理」 —「グローバルな複雑性」を加速させよ!—	遠藤英樹(5)
災害と人文社会科学が向き合うべき課題 —災害は民主政治にどのような影響を及ぼすのか—	小関素明(25)
計算不可能なものへの知に向けて	亀井大輔(43)
国際公役務としての先端科学技術ガバナンスの可能性	川村仁子(61)
現代社会が直面する諸課題に対して政治学が貢献できること —立命館大学人文科学研究所での共同研究を手がかりとして—	加藤雅俊(93)

小特集：日本の中世社会と近現代への文化的継承

巻頭言	ウエルズ 恵子(105)
大岡昇平「釣狐」考 —狂言<引用>と生成過程と—	花崎育代(109)
内田百閒「柳檢校の小閑」と『方丈記』 —消えない「淋しさ」と隔たりの「感動」—	松原大介(127)
Fox Possession in Medieval Japan: The Reality of the Belief and Treatment of the Illness as a Shadow of Political Unrest	Akiko Mieda Keiko Wells(153)

論文

17世紀フランスの妖精物語とシャルル・ペローの試み —融和と革新の教訓譚—	大山明子(169)
「教育の困難」 —障害にかんする公式見解と社会学的発見のずれ—	種田博之(203)
観光研究のアフェクト(情動)論的転回 —「感情ネクサス」の生成変化について—	橋本和也(225)
アルテミス合意の規範的評価	山口達也(251)

2024年3月

立命館大学人文科学研究所

